

戸川秋骨

夏目漱石氏の
文学評論を読む

夏目漱石氏の

文学評論を読む

夏目氏の「文学評論」は途方もない面白い本である。途方もないというのはその取扱っている題目が、もっとも平凡なるイギリスの十八世紀文学とあるにかかわらず、その扱い方が非常に面白く、題目と内容とが甚だしく相違しているから言うのである。或る意味から言えばその面白味が「猫」と匹敵すると言っても良いかも知れぬ、少くとも著者の創作「虞美人草」や「坑夫」などと比べたら遙かに面白く——普通の意味でいうのであるが

——また遥かに了解し易いものである。しかもこれが大学の講義であるというからには著者が教授としての講義ぶりも察しられて、大学の学生から惜まれているのも当然なことと思われる。著者が血を濺そそいだとまで行かなくとも、とにかく少くとも夏期の休業を棒に振って草稿を作った、この評論を単に「猫」に匹敵すべき面白いものだと言ったが著者は苦笑せられるであろう。無論この「文学評論」の価値がそんな処にあるのでないことは明瞭であるが、余興としてこんな長所もあると云うことを断つて置くのである。殊に面白くない平凡極まる十八世紀の

英文学をやかましく評論し、しかもなおこれほど面白く可笑しく仕上げた手腕に敬服したので特に劈頭へきとうにこれだけのことを断ったわけである。この書の価値は文学史の扱い方と各作家に対する論断の明晰で人をして納得せしむる処に在ること勿論である。

二

日本に外国文学がやや文学として紹介されたその第一はイギリスの十八世紀文学であった。無論その前にもイ

ギリス文学の翻訳はあった。しかしこれは秩序もなく文学としての興味もなく、ただ小説の筋道は面白いと感じて翻訳したものに過ぎなかった、文学としての外国文学を言いだしたのはこの十八世紀文学である。アデイソン、スチール、スウィフトなどという名は雑誌等に片仮名文字で載せられた最初の文学者の名であった。坪内先生や内田不知庵先生などが頻りにこれ等の名を紹介されたものであった。しかしその時からしてわが文壇は非常に多忙でたちまち十九世紀初期の英文学にうつりついでまたその後期に及び更に大陸文学に及び、また翻って現代英文

学をしらべるといふように転々玉をころばすように押し移つて、余等をして忙殺せしむるような有様であつた。この移り行を調べたら面白いこともあろうがそれは今いふべきことでないとして、さてこの当初紹介された十八世紀の英文学は如何程わが文壇に乃至ないしはわが社会に知られたであらうかといふ段になると、一向著しい痕を残していない。わが文壇の十八世紀に関する知識はすこぶる乏しいものである。しかし余程篤学の人でない以上はかやういふことを研究することは出来ない。この急がしい目先を争う世の中でも、かようなことをするのは骨董い

じりと誤まられるくらいであろう。

三

しかるに夏目氏のこの書は則ちそういう研究を試みられたその結果である、しかもそれが決して骨董いじりではない。したがって古書古文を注釈したり珍物を並べたりした自慢ばなしではない。一々現代に接し、人情に従い、且つ高い批評誤をもつて見たもので、一言にして言えば表題の通り立派な文学評論という文字をもつて蔽う

べき性質のものである。さらにその評論の方法が斬然一機軸を出している。この事については著者も特にその方法を選んだことを書物の初めに明言しておられるが、実際在来の文学史とは全くその趣を異にしている。西洋人の手になった文学史は立派なものであるが、いずれもわれら日本人には物たらぬ感じがする、そのうちから面白い観察や立派な論断が拾い得られはするが全体において直接吾人の要求する処に副そわらないような感じがある。これは夏目氏も本書の内で行われているように西洋では説かずとも社会一般が承認していることは略してしまう

からであろう。ところがわれわれにはその略されるところが大事なのである。その適例は文法の本に見ることが出来る。西洋人のこしらえた文法の書物は立派なものであるが、何となく初学のものには物足らぬように感じられる、日本人の作ったものは注意して親切に拵えたものでさえあれば、西洋人の学識より下にある作でも役に立ち、且つ面白く見られるようである。夏目氏の学才がゴス氏やガーネット氏と比して何程の長短があるか知らぬが、この書は吾人にとって遙かに上記両氏の文学史よりは面白く且つ有益である。

それでは何がその特点であるかというところ、先ず著者の批評論に入らなければならぬが、それを言っていると長くなる故、先ずそれは略して、その結果として現われてくる体裁について言えば、第一に十八世紀の状況一斑を説いておられる。それが恐らく極めて困難な仕事で、同時にまたわれわれの要求する大事な点である、文学は時代の産物であるから時代を知らないとわれわれには一向興味がない、夏目氏は細目を九か条に別け百六十頁にわたって政治や芸術やロンドンの状態や、珈琲店や料理屋のことを書いておられる、しかもその書き方がすこぶる

面白い。「猫」的趣味のあるというのは特にこの辺のこ
とを言ったのである。十八世紀文学は平凡であつてもそ
の社会は必ずしもさようではない、またよし社会も平凡
であつたとしても、後者からこれを見れば變つたところ
があつて面白い。著者は当時の状態を写すに抽象的でな
くあくまで具体的に書いている——また素よりかような
ことは具体的にしなくては役に立たないのであるが
——あたかも自分が見て来たように書いている。それ故
に至極面白いのである、その面白い処を少しでも引用し
て読者にお目に掛けたいというが、なかなか長くなるか

らそれは残念ながらやめて置く、とにかく十八世紀文学が嫌な人でもこの書の当時の社会状態を写している処だけでも読めば為になる、このごろの暑い時分に読めば暑さを忘れること受け合いである。著者には失礼になるから知れぬが温泉場や海辺で寝ながら読むにも適している。殊にロンドンの風流才子が。バスへ鉱泉をのみに行くところなどはこのごろ避暑に行つて読んだなら一段の面白味があるであろう、薬屋の広告にあるが、これは良薬にして口に甘きほうである。

四

十八世紀の社会を大体叙述し終つてから、著者はその代表的文人を挙げてこれを評論している。すなわちアデyson、スウィフト、ポープ、デフォーの四人である、いづれに対しても立派な論評を下している。余の浅学であるためであるかも知らぬが、その中には前人未発の論断もある。そしてそれは極めて論理的で、よく納得させなければ已まないという趣を備えている。中にも著者がもつとも力を用いたというべきかそもそもまた著者の気

に入つたといふのか、もつとも悉くわしいまだもつとも明快な論評はスウィフトに對するものである。スウィフトについて余の面白いと思つたのはポープである。余一個の感想を述べると、余はかねてからスウィフトの作を面白いと思つていた。そして西洋の批評家がスウィフトを大文人としているのを読んでいた。しかし何ゆえスウィフトが豪いのかガリヴァーは何ゆえ面白いのかそれは少しも解らなかつた、素よりスウィフトの痛罵の恐ばしいことは知つていた、その性行においても毒々しい罵り詈をやってゐることも知らぬではなかつた。ガリヴァーをもつて

人生を罵った。その罵り方の猛烈なものも感じてはいた。殊にその最後の馬の国に行くところなどは如何にも思いついた罵りかたで、万古にわたった人性の罵倒であると思った。しかし余は何ゆえそう感じるのかと云う段になると一向了解し得なかった、何ゆえならばガリヴァーの書き方が如何にも冷然として少しも人を罵ったり嘲ったりしたような風でなく落ち付いてというよりは統計表でも拵えているような調子で書いている。それであるから小供のお伽噺として読めるくらいなのであるが、したがってそんなすました書き方で如何して人を動かすことが

出来るのかと思つてそこところが如何しても解らなかつたのである。ところが著者はそこに明快な判断を与えてくれた。則ち、スウィフトの罵倒は三度の飯を食うよ
うなもので（著者はそういう文句を用いは仕なかつたと思
うが、その意はそうである）人生に対する大罵倒が即
ち平々凡々なる常文であるから、格別怒からず激せず、
極めて平調で行けるのだというように論断しておられ
る。素よりこの断定に来たのはじゅうぶん論理の道を踏
んでの後のことである。則ち著者はスウィフトにのみ百
四十頁を費しているのをもつてもその如何に力を尽した

かが解かろう。

五

これは全く余事であるが、著者もちよつと口を挿んで
いることで余も面白いと思つたことであるから、大事な
紙面ではあるがちよつと無駄言を入れる。即ちガリヴァ
ーが難船して日本へ来るといふところがあるが、しかし
その前にオランダの船か何かに救われた時、オランダ人
がガリヴァーを殺すとかいふ時に、日本人がいて大層ガ

リヴァーを気の毒がって生命を助けるとかいう条下がある。そしてそこでガリヴァーは日本人を賞めている。スウィフトが日本人を賞めるといふのは不思議なことだと思つた。それからデフォーのロビンソンには、著者が引用しているが日本人は不正直で残酷であるとのように出ている。これはちよつと事が顛倒しているように思われる、スウィフトなら日本人を悪く言いそうだが、それがそうでなくてたいへん日本人は親切だと言ひ、デフォーが却つて日本人は悪い奴だと言つてゐる。余はこれについて不思議に思つた。だいたい西洋の小説などに日本と

いう名が出ると妙にうれしいものである。外国で自国の国旗を見ると非常な感想があるというが——マーク・トウエンの中にも外国の海上で国旗を掲げた大船に遇った時の感想が書いてある——それと同じに殊に十八世紀のゴールドスミスやまたスウィフト、デフォーの中に日本という名が出ると異様な嬉しい感が起るものだ。それでこのガリヴァーとロビンソンとの二様の記事を見てつくづく考えた。そしてやや事が解けたように思った、というのはデフォーのように考えていたのが正当でスウィフトのは例の悪罵であろうと思ひ到ったのである、則ちス

ウイフトにおいてはガリヴァーの行くところはみな普通の人間のいるところではない、最後に至っては馬の国である、で、日本もリリパットやフーンムス（これは馬のヒソヒソというのから思い付いた名であろう）等と同じ人間以外の国と見て、その国人が親切であると言ったのであるまいか。リリパットがガリヴァーに飯を食わしたようにフーンムスがガリヴァーを扱ったと言うのではあるまいか。如何に賞められても小人や馬と一処にされてはイヤハヤ何とも恐れ入った次第だ、スウイフトという男は酷い奴だ、これは全く余計な話だがち

よつと余の余興を入れて置く。

六

著者はポープについても面白い珍らしい説を立てている。ホープの詩には詩らしいところが一つもない、人間論でも批評論でもみんな散文の題目である。それだにかかわらず大詩人として称せられているのは一見要領を得ないと言つて自ら疑問を置き、これが解答としてポープの性行を挙げ、さらにそのセンチメンタルな人間論や批

評論とは全く縁のなし、しかし秀逸な詩を二三挙げ、それから判断してホープは非常なセンチメンタルな人間で即ち時世が時世であつたから立派なセンチメンタルな詩人になつたのではなからうかと言つておられる。これは著者も断言はしていない、が余は面白い珍しい観察だと思ふ。若しポープが十九世紀に出たならばバイロンのよくな詩人になつたかも知れないのである。しかし十八世紀の常識的な知的な世の中にいたため、散文の題目とすべきものを詩として歌つたのであろうと、これは如何にもそうかと思われる、別にセンチメンタル（性行にはな

るほどセンチメンタルとしてもいいところがあるが）なところがないければ後のバイロンなどが崇拜するはずがないのである。余はこの点即ちバイロンがポープを崇拜していたということについてもじゅうぶんな了解を得て居なかつたが、著者のこの一説に依つて少なからず得るところがあつたように感ずる。

七

著者のアデイソンの評は正当であるがホープやスウィ

フトのように奇抜ではない。かつアデイソンについては
そう珍らしい観察を下すべき余地はないかと思う。最後
のデフォーに至っては著者は少し六ヶ敷^{むす}い論^しをしてい
る。そして結局デフォーを貶している。これに対して余
は格別異議はない。殊に著者は幾多の例証を挙げて説明
しているのであるから确实なものであるろう。しかしそれ
にしても何ゆえあのロビンソンが評判になったものか、
ガリヴァーと並んで英文学の大作となっているのは何の
ためであろうか。あれはぜんぜん偶然のことであろうか、
世の中にはよく偶然のことからつまらぬことの万世に伝

えられることは間々ある。ロビンソンもその類であろうか。或いはイギリスの海事思想と連関して評判になったものか。即ちまたわが「不如歸」の百版を重ね「肉弾」の数十版を重ねると同じような事情でもあるのか。著者がデフォーを貶するに異議はないが貶するならばロビンソンが有名になった理由の説明がほしかったのである。

十八世紀にはまた大頭おおみたまがいる、ゴールドスミスもいる、ジョンソンという大変物もいる、フィールディング等の小説家もいる、殊に余にはジョンソンをもって大文学とする所以が解ったようでもまだ真実に解っていない、まだ批評的に論じられたことがないからであろう。この頃三宅雪嶺先生のジョンソン二百年記を読んだが、それでもジョンソンの大なる所以はまだ解らない。余は著者からこの大變物の批評・論断を聞き度かったのだが、この書にはそれが無い。何時かまたそれを聞かして貰う約束をここに結びたいものである。

それからこれは大塚博士も注意したことであるが政治のことがも少しあつてほしい。アデイソンもポープもスウィフトもデフォーもみな政治に関係がある。十八世紀文学と政治とは密接の関係があることは著者も知っていないことであろう。この関係を一層くわしく聞きたかった。しかしこれは余の性癖がそう感じさせたのかも知れぬ。最後に引用の英語に対する翻訳がみな巧みに出来ている。著者が手を下して訳されたのであろうが見事なものである。

述べたいことはまだまだ山とある、全体余は近頃この

十八世紀に對して多少興味を持ち得たのでそれについていろいろ尋ねて見たく、また自分にも言つて見たいこともあるが、他の迷惑にもなるし時候がらあまり骨も折れるから、几て略して置く、要するにこの書は面白いこと限りなく為になることはまた限ない、凡そ文学の学生は是非一本を購うて損はないと思う。余は徹頭徹尾この本の賞賛者である。

(明治四二・七・二三―二九「東京二六新聞」)

日本文学電子図書館

夏目漱石氏の文学評論を読む

著 者 戸川秋骨

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第15巻」角川書店
昭和41年4月20日 5版発行

日本文学電子図書館